

「心のズレ 生き返れ」

～放蕩息子は誰か？～

ルカ15：14～32 ヨナ4：1～12

今回、2つの物語を通してメッセージが語られました。1つ目は放蕩息子です。もう1つがヨナになります。この2つの物語を通してある共通の部分について見ていきます。

放蕩息子のあらすじについて

この物語は父、兄、弟が出てきます。父の財産を2等分にし、それを手にした弟は家を出て放蕩の限りを尽くし、やがて使い果たしてしまいます。そこで、父の家に帰ることを決心して戻ってきます。父は弟の帰りを心待ちにしていたので、帰ってきた弟を歓迎し大宴会を催します。それを知った兄は父に対して怒ってしまいました。「父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』」（ルカ15：31～32）」と物語は終わっています。この後、この父の言葉を聞いてどのような決断をしたのかは聖書は記していません。

ヨナのあらすじについて

ヨナは神の預言者でした。ヨナはイスラエルの敵国であるアッシリアの首都ニネベに遣わす預言を受けました。ヨナは敵国が神の預言の言葉を聞き、悔い改めるのではないかと考え、その命令に従わず、タルシシュへ逃れる船に乗ります。しかしその時、船が嵐に合い、その原因を調べていくと、ヨナが神の命令に背いていることが分かり、海に放り出されてしまいます。その時、大きな魚がヨナを飲み込み、3日3晩神と向き合い、ヨナ自身が悔い改めます。その後、ニネベに辿りつき、神の言葉を伝えます。ニネベの王はその言葉を聞き、国をあげて悔い改めたのでした。その時に「ところが、このことはヨナを非常に不愉快にさせた。ヨナは怒って、主に祈って言った。（ヨナ4：1～2）」とあるようにヨナは怒っています。神はヨナをなだめるためにトウゴマの木を生えさせたりしますが、「私が死ぬほど怒るのは当然のことです。」主は仰せられた。「あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜んでいる。まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわかまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜がいるではないか。（ヨナ4：9～11）」と記してヨナ書は終わっています。

この2つの物語より～放蕩息子は誰か～

この事からも分かるように2つの物語には結論が書かれていません。怒った兄、怒ったヨナが、その後どのような決断をしてどのような行動を取ったのかは想像するしかありません。素直になれたのでしょうか。それともその怒ったまま生きていったのでしょうか。この2人の人物以外の方も含めて考えてみたいのです。神様、ヨナ、ニネベの人々、放蕩息子の父、兄、弟です。それぞれの構図を見ていくと同じような関係性を持っています。これは私たちの内側にある葛藤を物語っているものでもあります。放蕩息子のたとえばであれば、私たちは兄でもあり、弟のようでもあります。兄のように正しく行動することができるが、できてい

ない人を裁いてしまいがちではないでしょうか。弟のように、自分の思うがままに生きている部分もあります。ヨナ書であれば、ヨナのように神の言葉を聞くことができますが、感情的になったり、従えない部分もあります。またニネベのように、神の言葉を聞いたなら素直に悔い改めますが、それが長続きせず、喉元過ぎたら、元の生活に戻ってしまうようなものです。これを聞くと私たちと一緒であるように感じます。

魂の管理者として

ここで共通することが父と兄、神とヨナの関係性です。兄は弟を赦した父を受け入れることができなかった。またニネベの悔い改めを受け入れた神を受け入れることができなかったことにあります。すなわち、それぞれの日常生活の中において、その関係に隔たりがあったのかもしれませんが、自分の心の内にあるものを諫めていかないといけません。私たちは魂(知性、感情、意志)に振り回されてはいけません。私たちは霊的な存在となりました。そして助け主なる聖霊(パラクレトス)が与えられています。すなわち神の霊が私たちの霊の部分に働き、私たちを助けて下さるのです。私たちは霊の部分に魂を凌駕していれば、助け主なる方によって正しい決断をすることができます。しかし反対に魂に優位性があれば、私たちは感情や知性によって行動していきますので、私たちの劣等感、嫉妬、比較、理不尽な行動され怒ったり、自分の常識によって裁いたり・・・と古い生き方が出てきてしまいます。

私たちはどのように生きていきますか

放蕩息子のシーンです「立って、父のところに行って、こう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」」こうして彼は立ち上がり、自分の父のもとに行った。(ルカ15：18～20)」私たちはいつも神様と正しい関係を築いていかなければなりません。そして正しい関係を築くことができれば、自分の弱さを素直に認めることができます。私たちは自力では隣人を「愛する」ことはできません。しかし神様によって「愛そう」とする、同じように「(自分を、相手)を赦そう」「(自分の弱さを、相手の弱さを)認めよう」「(どんな時でも)喜ぼう」とする決断が大事なことです。正しい事は分かっている、しかしできない・・・ということ。これが心のズレです。私たちはこのはざ間で戦い抜くかということです。私たちが自らをコントロールして主にあって正しいことをしていきましょう。

まとめ

私たちは今、どのように生きているのでしょうか。放蕩息子の兄のように過去に生き、ひねくれたまま歩みますか？それとも神との関係を正しく保ち、その時の最善を尽くし、ベストな行動をしていきますか？そのためには自分の弱さを認めて、素直に戻ることが大切です。神は私を愛したように私たちの隣人も愛しているのです。私たちは神が愛した人とどのように接することができますか？私たちは日曜日の神様の前に出て、心のあるズレを元に戻し、生き返りましょう。そして御言葉を土台にして新しい歩みをしていきましょう。

(要約者:平澤 一浩)

(11月19日)